

湖面

黄泉の国の湖に棹さして
僕は進んでいった
それは義務であるかに思われた
つまり、目的のない義務に・・・

だが僕は目を凝らしていた
舳先が背の高い葦をかき分ける度に
さも何かを待ち受けているかの如く
息をこらして見つめていた

この国では陽光はぼんやりと薄められ
影は限りなく透明に近かった
半ば霧で飽和した大気に
陽光の大半は吸い込まれてしまうのだ

既に舟を浮かべて10日が過ぎたが
見えるものは間近の葦ばかりで
視界は常に手の届く範囲に限られ
僕は狭い湖の中をどうどうめぐりしているようにも思われた

それはなぜか孤独ではなかった
ああ、何という涼しさだったろう
このような義務に明け暮れるというのは
ああ、何と^{さすが}清々しいことだったろう

葉擦れの音は決して単調ではなく
限られた視界の奥には
常に何かの気配がひそみ
僕は心を張りつめて棹さしていった

岸に近づいているのかいないのか
それは全く分からなかった
しかし水面は続いていた
これが地面だったら僕は焦燥に胸をかきむしっただろう

僕はゆっくりと進んでいった

黄泉の国の薄い陽光の中を
それは義務であるかに思われた
つまり、目的のない義務に・・・

(1991.5.20)